

[要旨]

合理性の階梯

ー R・ブランダムにおけるヘーゲル主義への一視角

大河内 泰樹

『明示化すること *Making It Explicit*』(1994)において、規範的語用論と推論的意味論に基づく哲学の体系的プログラムを提示したR・ブランダムは、『大いなる死者たちの物語 *Tales of the Mighty Dead*』(2002)において、哲学史上の巨人たちの解釈に取り組む。その「序論—合理性の五つの構想」において、彼は論理的・実践的・解釈的・推論的・歴史的という五つの合理性モデルを提示し、最初の三つのモデルで、分析哲学における合理性理解の発展を描いたあと、推論的・歴史的モデルで、ヘーゲル的な合理性の理解を示す。この五つの合理性モデルは、順に次のモデルがそれ以前のモデルを取り込みながら進んでいく発展の過程として理解され、最後の歴史的な合理性において、この過程全体が包括されることになる。こうした合理性理解は、ヘーゲルの『精神現象学』をモデルにしたものである。

さらにブランダムは、カント哲学を自らの規範的語用論にしたがって解釈しながら、これがヘーゲル的な合理性の理解によって乗り越えられなければならないと主張する。そこで、ヘーゲル的であるとブランダムが自ら理解しているのは、①ことばの意味は推論的關係において理解されねばならないということ、②さらにこの推論的關係の中でことばの意味を可能にする規則は社会的なものとして見なされなければならないこと、③さらにその社会において形成される規則は、歴史的なものとして見なされなければならないことの三点である。しかし、この歴史的な合理性理解は決定論という意味での歴史主義を意味するわけではない。ここでは、規則の解釈は、慣習法との類比で理解されており、過去の判決の解釈を通じて規則が決定されると考えられている。この新しい「判決」もまた将来の解釈の資源として用いられるのである。

こうした合理性の理解によってブランダムは分析哲学の要求する合理性が、ヘーゲル主義的な歴史的合理性理解を内在的に要求することを示している。